

■プロローグ

暗い部屋だった。一切の照明が灯を落としている。既に時計の短針が直上からやや右へ倒れ始める時刻であり、月光や星明かりも厚いカーテンに遮られ、室内には届いていない。

テーブルの上で、室内に頼りない光の波を投げかけているのは古びた燭台と、その上で揺らめいている蠟燭の炎だけだった。橙色のか細い光が直接に照らしているのは、テーブルの前に座し、厚いフードを深く被った人物が一人。光の輪が辛うじて届くぎりぎりの範囲に、寝台に身を横たえた人物が、喘ぐような息づかいのシルエツトを浮かび上がらせていた。さらに、その周囲に数名の人影が見えたが、彼らは薄闇の中に輪郭を溶け込ませ、男女の別すら定かではなかった。

その光景だけから判断すれば、『中世』と呼ばれた、はるか過去の地

球時代の一時期であるかのように見えたとはいえない。

「……見えました」

テーブルの前に座していた人物が、深く垂れ込めたフードの中から
唖れた声を発したのに、はっと室内の空気が動いた。

「大いなる苦難が待ち受けておりましょう」

枯れ木を擦り合わせるにも似た声が続いた。

「されど、その苦難を乗り越えられたとき、お世継ぎを得られましょう」
「……世継ぎ……だと？」

普通ならその声が他者の耳に達することはなかったかも知れない。
それほどに微かな、辛うじて室内の空気を僅かに震わせる程度の音量し
か、その言葉は孕んでいなかったのだから。極度に静まりかえっていた、
この室内で、その声は確かに居合わせた全員を色めき立たせた。ざわ、
と空気が震え、一瞬後に明らかに喜びと分かる雰囲気揺れた。

「わたしに世継ぎが……？」

「お世継ぎは……」

喘ぐような問いに答えず、嘎れ声が淡々と言葉を紡ぐ。さきほどまで、ただの深沈とした静寂に沈んでいるだけだった空気がにわかにぴんと張り詰めたかのようだった。

「……いずれ、玉座に即かれよう。専横なる者たちは、その座から退けられ、その後、新たな玉座の礎が据えられることとなる……」

おお……再び声にならぬどよめきが室内を満たす。

「……さま」

跪く気配に続いて、興奮の震えを無理にも押さえた声は寝台の主に向けられていた。

「お聞きになりましたか」

瞬時、室内を再びの静謐が満たした。テーブルの前の一人を除いた全員が息を呑み、ほの暗い薄闇に覆われた寝台に視線を注ぎ込む。視線が熱を帯びるなら、寝台とその主は見る見るうちに炎に包まれたかも知れないと思われるほどに、期待と歓喜をはらんだ視線だった。

だが、寝台からは中々彼らの期待する言葉は返っては来なかった。耐

えかねたらしい一人が身を起こして呼びかけを発しようとする。他の一人が素早く腕を払ってその動作を遮った時だった。

「……聞いた」

絶え入りそうに弱々しいが、はつきりとした意思が、その声を実際の声量以上に大きく響かせた。

「この身体で世継ぎを得られるというか……その子が玉座を得る……新たな王朝を……そうか……」

右腕が僅かに上がり、誰かを呼び寄せる形に動く。応じて、一人が跪礼から立ち上がって、主人の枕元あるじに歩み寄る。

「ならば……試みてみよう……そなたたちの勧めに応じて……世継ぎが得られるので……あれば……間違いは……ないのか」

「何もかも仰せのままに。必ずや、ご快癒なさり、お世継ぎを得られるでありますよう」

「……では、進めよ……急ぐが良い。我が生命が……先に尽き果てしまわぬ前……に」

再び、跪礼を取る音がフロアに低い響きを走らせた。

「……皆、もう去るが良い。侍医を……参らせよ……痛みが……酷い」
「おおせのままに」

一瞬前までの静寂が嘘のように、室内が慌ただしい空気に包まれた。燭台が下げられ、照明に灯が入れられて室内の佇まいが浮かび上がった。豪華に設えられた、広々とした寝室だったが、中に籠もった病臭と薬品臭と、贅沢な調度に相応しからぬ近代的な医療器具の数々が、その部屋が病室以外の何物でもないことを告げている。

燭台を前にテーブルに着いていた人物は、しかし、そうした光景を目にすることはなかった。二人の男が、燭台と共にその人物を誘い、明かりが灯される前に厚いドアで視界を遮ったからだ。

「約束のものだ」

男の一人が小さなケースを差し出すのに、華奢ではあるが意外にしつかりとした肉付きの手が厚いぞろりとした衣服の下から伸びてきて、ケースを握り込んだ。片手にケースの蓋を弾き開ける。

「確かに」

「……見事な予言だったな。さすがに……ただ、今日のことは忘れて貰う。それも約束の内だったはずだ」

小さく肩を竦める仕草が、衣服越しに見て取れた。言葉を交わすつもりはないらしい、と見て取って、男たちは口をつぐむことに決めたようだった。

館の外は凍てつくような星空だった。視界の一面は見上げるほどに天を突き刺している山嶺に切り取られ、星空を背景に暗く沈んでいる。館から数十メートル。大型の地上車が、後席のドアを開いて彼らを待っていた。ただし、男二人は同乗するつもりはなく、性別不詳のその人物をドアの奥に乗り込ませると、見送ることさえなく踵を翻す。

「さて……」

動き出した地上車の中で、自身の聴覚にさえ達するか達しないか、その下限ぎりぎりの呟きが厚いフードの下からこぼれ落ちた。

「新しい玉座の礎……ね。誰がそれに即くのやら……」